

審査論文要旨（日本文）

論文提出者氏名： 田子 友哉

審査論文

題 名：Significance of Radiofrequency Ablation for Unresectable Colorectal Cancer With Liver Metastases

（切除不能大腸癌肝転移に対する RFA の意義）

著 者：Tomoya Tago, Kenji Katsumata, Ryutaro Udou, Kenta Kasahara, Junichi Mazaki, Hiroshi Kuwabara, Masanobu Enomoto, Tetsuo Ishizaki, Yuichi Nagakawa, Katsutoshi Sugimoto, Takao Itoi, Akihiko Tsuchida

掲載誌：Anticancer Research 41(11):5539-5547 (2021)

（審査論文要旨：日本語論文の場合 1,000 字以内・英語論文の場合 500 words）

【背景と目的】

大腸癌において肝転移は予後規定因子である。肝転移は全大腸癌患者の 30%で発症し、大腸癌死因の 3 分の 2 を占める。本研究は、大腸癌肝転移に対するラジオ波焼灼療法（RFA）を含む集学的治療の意義について明らかとすることを目的とした。

【対象および方法】

東京医科大学病院消化器外科・小児外科で 2001 年から 2021 年の間に大腸癌肝転移に対して治療を受けた 147 人を対象とし、RFA 群（n=26）、切除群（n=92）、化学療法群（n=29）の 3 群に分類し臨床腫瘍学的因子および予後について解析した。主要評価項目は全生存期間とした。統計学的解析は、Fisher の正確検定、Mann-Whitney の U 検定を用い、生存時間分析は Kaplan-Meier 法にて単変量解析を Log-Lank 検定、多変量解析は Cox 比例ハザードモデルを用いて行った。解析ソフトは IBM SPSS Statistics ver. 27 を使用し、p 値 0.05 未満を統計学的有意差ありとした。

【結果】

RFA 治療を含む集学的治療を受けた RFA 群と化学療法群は切除あるいは手術不能症例であり、切除群は根治切除可能症例であった。臨床腫瘍学的因子より、病勢の進行は化学療法群、RFA 群、切除群の順であった。全生存期間中央値は、RFA 群で 44.9 か月、切除群で 49.5 か月、化学療法群で 11.6 か月であり、5 年生存率はそれぞれ 34.6%、42.4%、6.9%であった。

Log-Lank 検定より全生存期間は切除群>RFA 群（p=0.027）、RFA 群>化学療法群（p=0.003）であった。

【結論・考察】

RFA は手術同様に局所療法に属し、全身療法である化学療法と比較すると治療領域は限定的であるが抗腫瘍効果が高い。本研究の結果は、切除不能症例である RFA 群の生存成績が切除群に匹敵し許容しうることを示した。手術のみでは根治不能な症例に対する補完的な RFA の適応が根治率の上昇をもたらし、また、予後規定因子となっている肝転移病変を RFA にて局所制御することが予後延長に寄与したと考えられた。RFA は低侵襲で、汎用性の高い治療法である。切除不能あるいは手術不能な大腸癌肝転移の治療において、今後エビデンスの蓄積が得られれば根治あるいは長期予後を得るための集学的治療の重要な一端を担う可能性を有することが示唆された。